

## 真実を伝える／苗田満里奈さん

私は世界で起きていることをもつと知りた。この世の真実を多くの人に伝えていきたい。そして、平和な世界を築く力になりたい。なぜなら、今までの多くの活動を通して、命や平和のについて深く考えるようになったからだ。

私は、中学校の修学旅行で訪れた長崎の原爆資料館で、大きな衝撃を受けた。原爆が、戦争がどんなに悲惨なものか、初めて自分のことのように真剣に考えた。熱風で身体を焼かれた子供達の写真を見て、涙がこぼれそうになった。冷たい空気の中、十一時二分で止まった掛け時計が刻む秒針の音がやけに大きく聞こえた。それは、被爆して亡くなっていった方の心臓の音だ。平和を返せという命の叫びだった。

これを機に、私は戦争や平和のことを本気で考えるようになった。そして、現在も世界中のあちこちで火花があがり、沢山の罪のない人たちが亡くなっていくのに、そのことに対して私達はあまりにも無関心ではないかと考えるようになった。私は、長崎で感じたことを少しでも多くの人に伝えたいと、翌年、終戦の日に行われる弁論大会で思いを語った。優勝賞金は劣化ウラン弾の被害に苦しむイラクの子供達に寄付した。

これで少しでも子供達の命を守る手助けが出来たと私は充足感を感じていた。が、寄付をするだけでは根本的な解決にはならないということも知った。一時的に人々の命を救うことは出来ても、将来の命までは助けられない。戦争や核兵器は、これから生まれくる命までをも奪ってしまうというのに。

高校に入って初めての夏、私は沖縄戦を現地で学びたいとの思いから、沖縄平和学習の旅に参加した。そこで、同じ日本に住んでいるにも関わらず学ぶことの少なかった沖縄戦の悲惨な真実を知った。また、沖縄の問題は過去の歴史だけにとどまらない。米軍基地の問題を抱えている。全国紙、全国ニュースではあまり採り上げないが、米軍のヘリが墜落し、米兵が犯罪を犯すということは日常茶飯事なのだ。うだ。

さらにこの旅は、人の心に訴えかける表現が大きい意味を持つのだと知る旅でもあった。米軍基地は本島の真ん中に大きく陣取っているが、その領域に食い込むような形で佐喜真美術館がある。私はその中の一枚の絵に釘付けになった。大きな大きな沖縄戦の図だ。綺麗な海と、黒い墨で描かれた、集団自決をする沢山の人。死んでいく人たちの真っ赤な血は、美しい海の青と混ざって不気味な色を見せていた。その巨大な絵に、私は圧倒された。この絵を見るだけで、その当時の人々の苦しみが伝わってくるようだった。戦争は人の心を壊してしまうものなのだと恐怖した。

翌年、私は国連に直接平和の思いを訴えるため、長崎から国連に派遣される高校生平和大使として様々な国を旅することになった。それまでは海外はおろか、日本国内も数えるほどしか旅行をしたことがなかったので不安で仕方なかった。けれども、最初に訪問した韓国で、その不安は一気に消え失せた。私達は最初、独立運動がはじまったタプゴル公園を散策した。初めての海外、初めて見る現地の方に興味津々できよるきよると色々な方向に注意を向けていた。すると、突然現地のおじさんが私に声をかけてきた。驚いて「韓国語話せません。」と言おうとすると、おじさんは優しく公園の中の石碑や建物について日本語で説明してくれた。近所の日本語学校の先生だったようだ。私は、韓国に行くことと反日感情が激しく、嫌がられるのではないだろうかかと心配だったのだが、そんなことはなく、むしろ大変親切にしてみらえて嬉しかった。このとき、個人を「国」でくくってしまうことなどできない

と実感した。実際に出会い、触れあってお互いを理解することは非常に大切なことだ。このように理解し合うことで平和を築いていくべきだと思った。

その後、私は同じく高校生平和大使の活動の一環としてペルーとブラジルを訪問した。南米での目的は、原爆のことを描いた映画の上映、被爆者の証言をビデオに収めることなどだ。初めての南米で地球の裏側。非常に楽しみである反面、不安もひとしおだった。

ペルーで驚いたのは砂漠のような色をした砂の山に沢山の簡単につくられた家があった、そこに沢山の人たちが住んでいるということだった。道路は舗装されていないし、植物も全くと言っていいほど生えていなかった。聞くと、首都リマでは雨があまり降らないらしい。だから生活をするために水を買いに行かねばならないそうだ。よってある程度裕福な人の住む家の周りには植物があるが、そうでない家は生活用水で精一杯であるため、植物を育てられない。そして、このことは貧富の差を明確に示すものだとわかる瞬間もあった。スラムの多い町から、首都の中心部に向かう途中の車窓から、薄茶色の砂の大地が草木で覆われた緑地になる境目を見つけた。それはくっきりと線が引かれたように明らかだった。

南米最終日は、ペルー最後の被爆者・植松亨さんの証言を撮った。植松さんは言った。「血液以外は全て病気だ。」植松さんは話し好きなのか、本当にたくさん

のことを語ってくださいだったが、この言葉はその大量の言葉の中で特はずしりと私の心の中に沈んでいった。更に、植松さんは身体よりも精神的な痛みが残っている、としきりにおっしゃっていた。

ブラジルでは在ブラジル被爆者協会の方々を迎えてくださった。会長の森田隆さんは、お茶目だがしっかりした優しいお祖父さんだ。

その森田さんが、私達を連れて病院に行った。長年連れ添ってきた奥さんが入院していると言った。脳卒中で倒れ、寝たきりになっているということだった。森田さんはにこにこと優しげに微笑みながら私達を病室へ案内した。私達は、証言ビデオ撮影のためにビデオを回す許可をいただき、ビデオを片手にゆっくりと室内へ入った。

中には、人工呼吸器をつけて横たわる奥さんの姿があった。ヒューヒューという呼吸音が、やけに大きく聞こえた。森田さんが、奥さんに「高校生が来てくれたよ。」と声をかけた。奥さんは、目は開いているけれど、呼吸をしているけれど、喋らない。たまに指に力を入れて握ったりほどいたりしているようだった。私達二人の高校生も、寝ている奥さんに言葉をかけた。私は、次回会うときは元気な姿を見せてくださいと言った。本当は、奥さんもまだに戦争を続けている世界に向かって訴えたいことが山のようにあるに違いない。それなのに、戦時中に受けた原

爆の後遺症によって今は言葉を発することすらできない。切ない、悔しい、悲しい。そのような思いが混じり合って、息が詰まりそうだった。本当に、原爆を、戦争を許せない。戦争が終わった今でも苦しんでいる人がいるということを、沢山の人に認識してもらわなければならないと思った。

「原爆はひどいよね。こんな風に、言いたいことも言えなくしてしまうんだから。」森田さんは、涙を流しながらも、力強く言葉を絞り出すように言った。私はまともにメモがとれなくなった。ビデオを回す井原さんの手は、震えていなかった。だろうか。私達は、次から次から、涙が溢れて止まらなかった。意識のない奥さんも、静かに涙を流していた。

私は、旅を重ねる毎にいくつもの真実を知る。初めて長崎へ行った時思ったのだが、戦争や世界中で起きている諸問題に関して議論をしているのは、一部の人だけではないだろうか。それを少しでも解消するため、これまでに私なりにできることは行ってきた。旅をしたり、人と出会って感じたことを作文に書いた。スピーチ大会で平和への思いを会場の方々へ訴えた。旅の成果を講演会という形で幅広い世代の方へ報告した。環境や平和をテーマにアニメーションを作った。被爆者の証言DVDを作り、県内の視聴覚ライブラリーに置いてもらった。しかしこれらはまだ受け取る方々の数が圧倒的に少ない。私は、もっともっと多くの方々にも真実を伝えたいのだ。

そこで、私はメディアと世論の力に注目する。平和大使の旅で学んだ『アンネの日記』の発行の過程はまさにそれだった。戦後、アンネの父がホロコーストの悲惨な事実を新聞に書いた。するとそれを見た大衆は、『アンネの日記』を刊行し、より多くの人にその事実を知らせるべきだとアンネの父に働きかけたのだ。こうして『アンネの日記』は、今や世界中で翻訳されて読まれている。メディアが人々に及ぼす力、そして世論が社会を動かす力というものを実感した。だから私は今、大学でより人々の心に届く方法や、新しいメディアの形を研究し試行錯誤している。

私は昔から絵を描いたり、文章を書いたりするのが好きだった。だから、それらの表現手段を使って人々に世の中の現状や真実を伝える仕事をしたいと考えている。今までの旅で学んできたことを、多くの人に伝えていきたい。私にはその意欲がある。そして、これからはより詳しく学び、人の心を動かすものを発信していきたいという夢がある。

だから私はピースボートに乗って、世界中の様々な環境で生活する人々を知って、交流をして、そこでもっと広い世界を知りたい。そこでまた、伝えていくべき世界の真実を知りたい。あらゆる文化背景を持つ人々と交流すること、日本とは違う文化の側面を知ることが、私の伝えたいことを効果的に届ける方法へのヒントになり得るはずだからだ。

私自身が直に学び、私にしかできない表現によって、それに触れた人に、世界の出来事や戦争、平和、命について少しでも興味を持ってもらえるような作品を作っていく。そうすることで、少しでも何かを考えるきっかけを提供していきたい。それが、私が世界を変えるために出来ることだと信じている。